― 花信風 ―

11月号の注目歌

燧ヶ岳はるか遠くに高くありまさかの坂を明日は登らん

波の音等間隔に寄せて引く誰かが蟹を捕つたと叫ぶ

身のかるく炭坑節の先頭にひよいと浴衣の男が入る

梅雨入りをまだかまだかと待っていて梅雨明けを待つ準備もできてる

梵鐘は山の辺の里に響き渡りやがて空へと吸い込まれゆく

七十年使いし鏡台とおき日の滲みて来よとひたすら磨く

朝床にホトトギス鳴く声聞きて有明の月をいずこに探す

朝の気と水と光を我が物に山田の稲は思春期あたり

柴田秀子 選

ヨーデルのやうにラ行を震はせてうぐひすの声峡に響けり

八年を経て九十歳となりし身にペースメーカーは臓器の一つ

沈む陽にかげる養老山脈はゆるり横たうそして夏来る

雪原は白く輝く遥かまで僕の足跡つけにでかける

駅員の鳴らす笛の音聞いてのち神戸のネオンはゆつくり去りぬ

たて糸もまたよこ糸も緩くなりわたしの中から何か零れる

草刈機地雷を探すかのごとく滑り台の下ゆっくり進む

庭越しに呼ぶ声のして外に出ず山の端離れて満月上りぬ